

# 主要部内在型関係詞節における凍結効果について<sup>1)</sup>

遠藤 喜雄

## 要旨

本稿では、日本語の主要部内在型の関係詞節を考察する。特に、IP 領域に見られる criterial freezing 効果の存在を指摘し、その性質を論じる。主に、日本語の主要部内在型の関係詞において IP 領域に凍結効果がある新しい事例を見ながら、比較統語論の観点から考察する。

キーワード：カートグラフィー、関係代名詞構文、凍結効果

## 0. 序

本稿では、IP 領域に見られる criterial freezing 効果（以下、C- 凍結効果）の存在を指摘し、その性質を論じる。主に、日本語の主要部内在型の関係詞節において IP 領域に c 凍結効果がある事例を見ながら、比較統語論の観点から考察する。

本稿は、以下の構成で議論を展開する。第 1 節では、c 凍結効果の内容を英語やロマンス系の言語を見ながら紹介する。第 2 節では、日本語の主要部内在型の関係詞節において、同じ c 凍結効果が見られることを示す。最後に、第 3 節で、本稿の理論的な含意を述べる。

## 1. 背景

自然言語の特質として、移動（movement）現象がある。移動は、意味役割が付与される位置を出発点とし、談話やスコープの関わる位置が最終点となる。具体例を見よう。

(1) a. Who do you think that John kissed\_\_\_\_ ?

scope semantic role

b. This book, I think John read\_\_\_\_.

Topic semantic role

これらの例では、動詞 kissed, read の目的語の位置で対象物 (theme/patient) の意味役割が付与され、(1a) では、文頭の位置で、スコープが付与され、(1b) では、主題 (topic) の談話の意味が付与される。これら移動により、連鎖 (chain) が形成され、この連鎖を通して、文頭の who や this book に意味役割と談話やスコープの2重の意味役割が付与されることとなる。

Rizzi (2006) で定式化されているように、連鎖の先頭は、移動要素が凍結される位置で、その凍結効果は以下のように定式化される。

(2) Criterial Freezing : An XP meeting a criterion is frozen in place

この内容は、要素が、スコープや談話の付与される位置に移動される、その要素は、その位置で凍結されて、さらなる移動が不可能になるという趣旨である。この効果の具体例を見よう。

(3) a Bill wonders [which book Q [she read \_\_\_\_ ]]

b \* Which book Q does Bill wonder [ \_\_\_\_ Q [she read \_\_\_\_ ]] ?

(Lasnik & Saito 1992)

(3a) では、wh 要素が補文でスコープを付与され、wh 要素 which book は、(2) により、補文の先頭の位置で凍結される。一方、(3b) では、同じ which book がこの凍結される位置からさらに、主文の文頭のスコープが付与される位置に移動し、非文法性が生じている。この場合、スコープが付与される位置で凍結された要素が、さらに移動されているため、(2) の凍結効果により、その (2b) の非文法性が説明される。

この凍結効果は、スコープや談話情報が付与される典型的な位置である文頭

で生じるのであるが、Rizzi (2009) や Laenzlinger (1998) では、凍結効果が文中で生じる事例が議論されている。まず、(4a,b) に見る Obenauer (1977, 1994) のフランス語の観察を基に、Rizzi はフランス語の数量表現 beaucoup 'a lot' が目的語の位置にも、そこから遊離された位置に生じることも可能である事実に着目する。

(4) a Il a mangé beaucoup de gâteaux

'He has eaten a lot of cakes'

b Il a beaucoup mangé de gâteaux

'He has a lot eaten of cakes'

この数量表現が wh である combien 'how much/many' になると、(5b) に見るように、遊離された位置に生じることが不可能となる。

(5) a Il a mangé combien de gâteaux ?

'He has eaten how much/many of cakes ?'

b \* Il a combien mangé de gâteaux ?

'He has how much eaten of cakes ?'

Laenzlinger (1998) は、この (5b) の非文法性を c 凍結効果に還元する。beaucoup という要素が、副詞表現であり、(4b) のように、基底の位置から遊離されると、その遊離の着地点は、スコープが付与される凍結される位置であり、そこから、さらに LF で文頭のスコープの位置に移動が生じると、凍結原理により、非文法性が生じる。一方、(5a) で基底の位置では wh 表現が生じるのは、基底の目的語の位置が c 凍結される位置ではないので、LF において、その位置から文頭のスコープの位置への移動が可能となる。ここで重要なのは、文中にも、c 凍結の位置が存在するという点である。次節では、文中に凍結される位置があることを日本語の主要部内在型の関係節を見ながら考察する。

## 2. IP 領域内における凍結効果

本節では、以下に見る構造を持つ日本語の主要部内在型の関係節を考察する。

(6) a. ...<sub>[IP...DP...]</sub>-N-Case

b. ケーキを皿の上に置いたのを取って食べた。

この構造は、主要部の名詞句が節の外に移動する次に見る構造と、基本的には同じである。

(7) a. ...<sub>[IP...t(i)...]</sub>-DP(i)-Case V

b. 皿の上に置いたケーキを取って食べた。

ここで注目したいのは、この主要部内在型の関係節において、以下に見る構造のように、主要部名詞句がフォーカス要素がつくと非文法性が生じるという新しい事実である。

(8) a. \* ...<sub>[IP...DP-focus particle ...]</sub>-N-Case

b. ケーキだけ／さえを皿の上に置いたのを取って食べた。

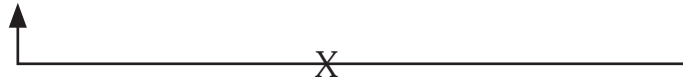
本稿の主張を先取りすると、この非文法性が c 凍結効果による。つまり、以下に見るように、フォーカス表現は、IP 内でフォーカス句 (FocP) を主要部とする句の指定部への移動が関与する。

(9) ... [IP [FocP DP<sub>i</sub> focus particle ... t<sub>i</sub>]-Case



この移動先は、フォーカスという談話に関わる c 凍結の位置なので、そこに移動された要素は、その位置で凍結される。そのため、そこからの移動は凍結の原理により不可能となる。

(10) ...Rel...[IP [FocP DP-focus particle (i)...t(i)...]-Case V



問題の文 (8b) の非文法性は、意味的な変則性に由来する訳ではない。というのも、次に見るように、主要部が外に生じる場合は、そこにフォーカスの要素がつくことが可能であるからである。

(11) a. ...[IP...DP ...]-focus particle Case

b. 皿の上にケーキを置いたのだけ／さえ取って食べた。

次節では、以上の点を、Kayne (1994) に見る主要部内在型の関係節の分析を見ながら詳細に説明する。

## 2. 分析

Kayne (1994) は、以下に見るように、主要部が CP の外に生じる外在型の関係節が、CP の指定部への移動が関与するとする。

(12) the [[<sub>NP</sub> cake] [ that John ate [<sub>NP</sub> < cake > ]]]...



Rizzi (2009) によれば、関係節の主要部となる名詞句は関係詞に関わる解釈が付与される文頭の位置 Rel の指定部の位置をターゲットにして移動する。この Rel は文頭のスコープや談話に関わる解釈が付与される凍結効果をもたらす位置である。

(13) the [[<sub>NP</sub> cake] Rel [ that John ate < <sub>NP</sub> e > ]] ...

本稿で問題にしている日本の場合、関係節が主要部の名詞の前に生じる。この場合、Kayne によれば、次に見るように、関係節が主要部の前の DP の指定部の位置に移動しているためである。

(14)  $IP_j D^0 [[_{NP} \text{cake}] [_{CP} C^0 [e]_j]] \dots$  (cf. Kayne 1994: 94)

Kayne は、主要部の名詞句が IP 内部に生じる事例と IP 外部に生じる事例は、基本的に同じ構造と派生を持ち、異なるのは、主要部の名詞句が発音される位置であるとする。その発音のタイミングは次のアルゴリズムにより決定される。

(15) A given chain link  $C_k$  can license PF deletion of another link  $C_l$  of the same chain only if  $C_l$  does not c-command  $C_k$ .

具体例は、次に見る通りである。

(16) ジョンは、メリーがケーキを皿の上に置いたのを食べた。

この主要部内在型の関係詞節においては、節の外に「の」という要素が生じている。本稿では、この「の」を D の主要部と考え、この指定部に、関係節が移動すると考える。


(17)  $[ \text{メリーがケーキを皿の上に置いたの} ]_j D^0 [[_{NP} \text{ケーキ}] \text{Rel} [_{CP} C^0 [e]_j]]$

さて、問題の主要部にフォーカス表現がつく問題の文を再考しよう。

(18) \*ジョンは、メリーがケーキだけ／さえを皿の上に置いたのを食べた。

本稿では、Belletti (2004) にしたがって、IP の内部にも、フォーカス句があるとし、その指定部にフォーカスとなる要素が移動する次の派生を想定する。

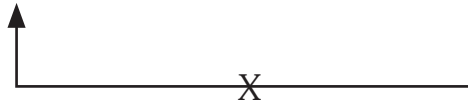
(19) ...  $[ \text{メリーが} [ \text{FocP} \text{ ケーキだけ／さえを皿の上に置いた} ] - \text{の}$



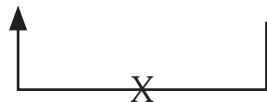
このフォーカス句は、談話／スコープの意味解釈が付与される c 凍結位置な

ので、そこからさらに移動が不可能となる。そのため、関係詞の意味解釈に必要とされる Rel の指定部への移動が不可能となる。その結果、主要部の内在型の関係節においては、その主要部へフォーカス要素がつくことが不可能となる。

(20) ...[RelP [メリーが [FocP ケーキだけ／さえを皿の上に置いた]- の



(21) ...RelP...[IP [FocP DP-focus particle ( i) ...t(i)...]-Case V



この場合、非文法性が意味的な変則性に由来すると思われるかも知れないが、前節で見たように主要部が外在する関係詞節においては、主要部にフォーカス表現がつくことは可能なので、問題の文の変則性は意味の変則性には由来しないと考える。

(22) ケーキを皿の上に置いたのだけ／さえを取って食べた。

ちなみに、この文が文法的であるのは、次の理由による。凍結効果は、スコープや談話の関わる主要部の指定部に要素が移動した場合に生じる。そのため、次に見るように、RelP 全体が FocP へ移動可能となる。フォーカス要素がついているのは、関係詞の主要部を含むより大きな DP なので、「ケーキを」が RelP に動くことは妨げられない。

(23) ...[RelP [メリーが [ケーキを皿の上に置いた]- のだけ／さえ



この種の凍結効果は、Rizzi (2006, 2009) において、イタリア語で観察されている。まず、次の例を見よう。ここでは、quale libro di Gianni “which



book by Gianni” を含む複合名詞句 (complex NP) が補文に生じている。

- (24) Maria non sa ancora [ [ quale libro [ di Gianni ] ] Q sia stato pubblicato ]  
‘Maria doesn't know yet which book by Gianni has been published’

この補文の文頭の位置は談話／スコープが付与される位置で、quale libro di Gianni “which book by Gianni” は、その位置で凍結される。しかし、その一部である di Gianni, は (25a) に見るように移動可能であり、凍結位置を含む補文全体を (25c) のように、移動することも可能である。

- (25) a E' [di Gianni] che Maria non sa ancora [ [ quale libro \_\_\_\_ ] Q sia stato  
pubblicato ]  
‘It is by Gianni that Maria doesn't know yet which book has been  
published’  
b \* E' [quale libro [ di Gianni ] ] che Maria non sa ancora [ \_\_\_\_ Q sia  
stato pubblicato ]  
‘It is which book by Gianni that Maria doesn't know yet has been  
published’  
c E' [ [ quale libro [ di Gianni ] ] Q sia stato pubblicato ] che Maria non  
sa ancora \_\_\_\_  
‘It is which book by Gianni has been published that Maria doesn't know  
yet’

このような事例を考慮して、Rizzi (2007) では、凍結原理を次のように洗練する。ここでは、主要部により牽引される要素 (= Criterial Goal) のみが凍結される対象となることが表現されている。そのため、移動した要素の一部や、それを含み込むより大きな要素は、さらに移動が可能となる。

- (26) Criterial Freezing: in a criterial configuration, the Criterial Goal is frozen in place.



この考えは、主要部内在型の関係詞節においても支持される。次に見るように、主要部の名詞句を修飾する要素には、フォーカス表現をつけることは可能である。これは、修飾要素を残留して、関係詞の主要部が移動可能となるためである。

(27) ジョンは [メリーが皿の上に子供だけで作ったケーキを置いた] のを食べた

### 3. まとめ

以上、まとめると、本稿では、IP 内部に談話／スコープの凍結のフォーカスの位置があり、その位置に移動された要素は、そこで凍結されるが、それを含み込む要素やその一部は凍結されないことを指摘した。そのため、Rizzi により提案されている probe-goal 式の c 凍結原理の定式化が必要であることを示した。

### Reference

- Kayne, R. 1994. The antisymmetry of syntax, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Laenzlinger, C. (1998) Comparative studies in word order variation, John Benjamins, Amsterdam / Philadelphia.
- Obenauer, H. (1976) Etudes de syntaxe interrogative du français, Niemeyer, Tübingen:
- Rizzi, L. (2006). On the form of chains: Criterial positions and ECP effects, in L. Cheng, N. Corver, eds, On wh movement, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rizzi, L. (2007) "On some properties of Criterial Freezing", in CISCL Working Papers – STiL – Studies in Linguistics, Vol.1, 145–158.
- Rizzi, L. (2009) Some consequences of Criterial Freezing. Paper read at the Criterial Freezing Workshop held at Kanda University of International Studies.

### 注釈

- <sup>1)</sup> 本稿は、2009年5月に神田外語大学で行われたワークショップにおいて口頭発表したものと2009年に行なわれた東北大学大学院と主都大学東京／都立大学における集中講義の原稿に加筆修正を加えたものである。このワークショップにおい

て、以下の方々からは貴重なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表したい。（敬称略）Luigi Rizzi, 井上和子、長谷川信子、本多正敏、上田由紀子、藤巻一真。尚、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して』（研究代表者：遠藤喜雄）および日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（研究代表者：長谷川 信子）の補助を得てなされている。最後に、本稿における不備は全て筆者に帰するものである。